

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点 個人人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

滋賀県近江八幡市

学校名

近江八幡市立八幡小学校

学校のURL

<http://www.city.omihachiman.shiga.jp/~hachisho/>

2. 学校紹介

学級数

1年:5組、2年:4組、3年:5組、4年:4組、5年:4組、6年:4組、特別支援学級:4組

児童生徒数

1年:151人、2年:137人、3年:171人、4年:126人、5年:133人、6年:139人

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

- ・学校教育目標
夢をもち 仲よく 元気で がんばる子ども
- ・人権教育目標
人権意識を高め、生きる力(自己実現する力)を培う子どもの育成

人権教育にかかる取組の全体概要

テーマ「人権意識を高め、生きる力(自己実現する力)を培う子どもの育成」

学力保障の取組<基礎学力>(人権としての教育)

学力保障・学習権の保障、自己実現、将来への展望をもたせられる教育をすすめる。

個が活かされ、ともに生きる仲間の育成<人間関係づくり>(人権を通じた教育)

人間関係・仲間づくりを基盤におき、人と人が豊かにつながり、ともに生きることをめざす教育をすすめる。

人権・同和問題学習の推進<人権学習>(人権についての教育)

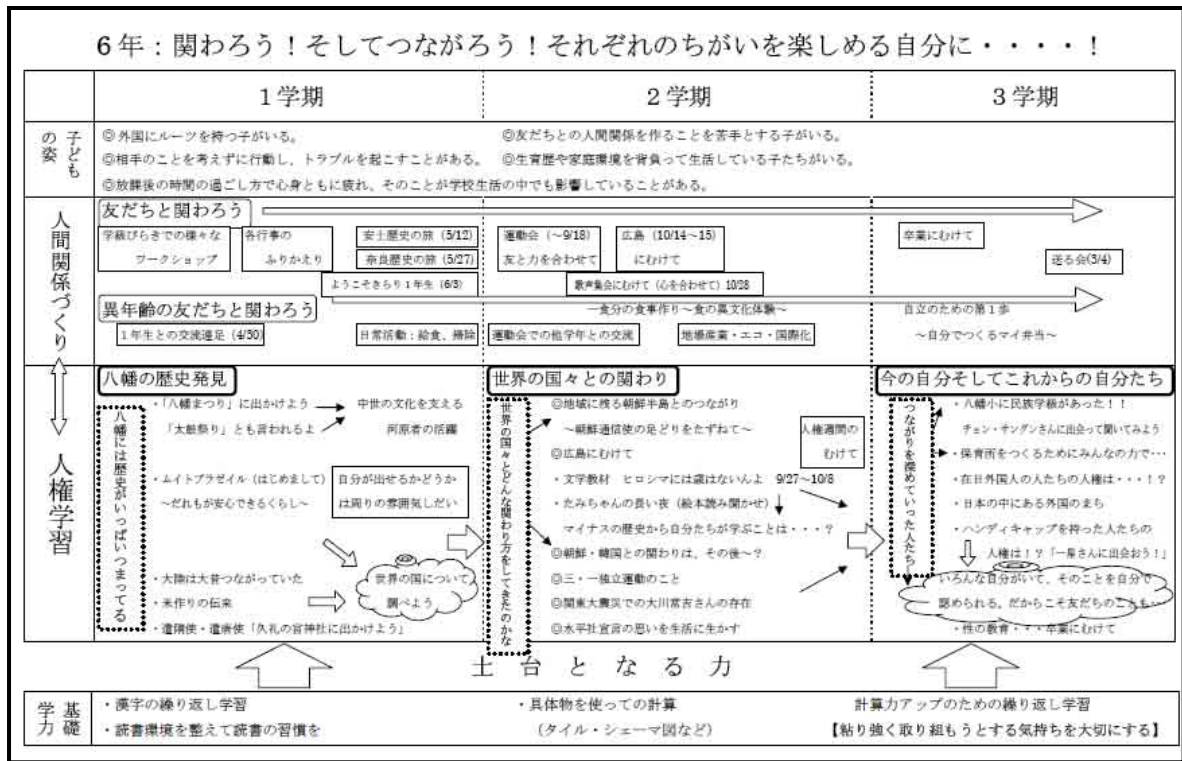
人権問題、平和、環境問題等の学習、人権を守るための学習をすすめる。人権意識を高め、より確かな実践力を養う。

各学年での「子どもたちにつけたい力や目標」の設定

- ・それぞれの学年の子どもの姿からつけたい力や目標を設定し、「基礎学力」「人間関係づくり」「人権学習」の3つの取組を人権教育カリキュラムとして年間計画を作成し、実践する。

3. 特色ある実践事例の内容

本校6年生における人権教育の取組



具体的実践事例 MUITO PRAZER 《はじめまして》 (個別課題「外国人」にかかわる実践)

1. 取組のねらい

それぞれのちがいを楽しめる自分になれる。

いろいろな友だちと関わって、つながっていく自分になる。

2. 取組を始めるにあたって

この学年の子どもたちは、個性、生育歴も家庭環境も実に多様で、外国籍の児童や外国にルーツをもつ児童がいる。だからこそ、「つながり」を大切にしたいと考えた。

子どもたちの作文や言動から「自分のことをわかってほしい、認めてほしい」、「周りの目を気にしないで、安心して過ごしたい」と思っているが、「人からどう思われているか気になる」という思いから、自分を素直に出せず、<みんな>に合わせて一緒に行動を取り、そのため息苦しさを感している子どもが多いことがわかった。誰もが安心して過ごせ、自分を素直に出しやすい仲間づくりに取り組むことにした。

1学期の早い段階で、まず各クラスでその子どもたちへの関わりを深め、それを学年に広めていきながら、年間を通して、日常生活・体験活動・学校行事などのあらゆる学校生活の中で、子どもたちとともに振り返り、自分をみつめる機会となるようにした。

社会科、国語科、家庭科や総合的な学習の時間をはじめ全ての教育活動で人権学習に取り組む。

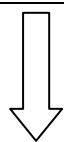
取組の前に家庭訪問で、外国籍の児童の両親の思いを聞いた。このことを受けて、次のことについて取り組むことにした。

- (1) 教室でも外国籍の児童が日本語やポルトガル語ではずかしがらずに話せるようする。

- (2) 外国籍の児童が、店等で両親がポルトガル語で話すことを、はずかしがったり止めたりしなければならない気持ちをなくすようにする。
- (3) 日本の子どもにとって遠い国だというイメージのあるブラジルと日本の関係・歴史について学習する。
- (4) クラスの子どもたちが、ブラジルの文化を知り、「関わりたい、楽しみたい」という思いをもつようにする。

3. 取組の流れ

毎日の授業や生活の中で簡単なポルトガル語を話してみる



『南に帰る』を使って、日本とブラジルの関係・歴史について知る。
 ブラジルの人（在籍児童・その保護者・外国語支援の先生）の話を聞く。
 ブラジルの特徴・ブラジルの文化・日本での思いなど
 感想を出し合う。

日本ラチーノ学院との交流



準学校法人日本ラチーノ学院...校区にあるブラジル人学校
 日本ラチーノ学院と「ひびきあい活動」を通じて、親子で交流する。
 運動会に日本ラチーノ学院のみなさんを招待し、一緒にカポエイラを踊る。

食文化に学ぶ

ブラジルをはじめ、琉球・アイヌを含む様々な民族や国の料理を作り食べる『食の異文化交流会』を行う。
 発展学習として、自分が調べたい国を選択し、新聞にまとめる。
 <関連>国語科・説明文「外国の人と理解し合うために」

4. 実践事例の実績、実施による効果

ブラジルの人（在籍児童・その保護者・外国語支援の先生）との出会いの感想を出し合う中で、

- ・ みんなの中で話すときに小さな声になってしまうのはなぜだろう？
- ・ 買い物の時など、店等でポルトガル語で話すお母さんを止めてしまうのはなぜだろう？

ということを考えてみた。すると、周りの人の行動や雰囲気の中で、このようなことをさせてしまっていることに気づいた。そして、「周りの人」の中には、自分もいることにも気づくことができた。逆に、周りの目を気にしてビクビクしている自分たちがいることにも気づくことができた。自分たちのつくる雰囲気の中で自分たちがビクビクしてしまっているのなら、ビクビクしなくてよい雰囲気を作っていけるのも自分たちだということを確認できた。

『食の異文化交流会』で朝鮮韓国料理（チヂミ）・台湾中国料理（チャーハン）・ブラジル料理（コッシーニャ）・沖縄料理（タコライス）・アイヌ料理（オハウ）という各国・各民族の料理に加え、近江八幡の地域料理（ようしょく）も《あぶらかす》を使って作るようになった。6つの料理について調べ、自分たちで作り、交流会でおいしく世界の料理を味わうことができた。

外国籍の児童が教室で『ポルトガル語』で話をする機会が増えた。大きな声で通訳する姿を見ていると、取組の中からこの児童が何かを感じてくれたのではないかと思われる。

また、わからないことを「わからない。」と言ったり、学習の説明をする先生に対して、「先生、早口でわからない。もっとゆっくりしゃべって！」「先生の使う日本語難しい！」と、注文をつけたりする姿も見られるようになった。

このような様子を見ていると、少しずつ自分を出して来てくれているのではないかと思う。

校区内にブラジル人の学校である『日本ラチーノ学院』の存在を知り、土曜日の『カポエイラ教室』に自主的に参加する子どももできてきた。学校で計画された中での交流ではなく、地域の中での自然な形での交流の様子を友だちから聞くことも、

子どもたちの喜びになってきた。

教室の中でポルトガル語で話したり、授業中に挙手をして発言しようとしたりする外国籍の児童の姿や、ポルトガル語で話しかけようとする周りの子どもたちの姿を見ていると、楽しみながら継続していくことが大切であることがわかった。

5. 実践事例についての評価

親子「ひびきあい活動」での日本ラチーノ学院との交流後、外国籍児童がポルトガル語で書いた感想と通訳による翻訳文や児童の感想を学級通信で紹介した。

おもしろかったです。なぜなら、日本ラチーノ学院の人はブラジルのことを紹介してくれて、日本のみんなが外国のことをもっと知ることができたからです。カポエイラもおもしろかったけど、難しかったです。サンバをおどる時もおもしろかったです。男の子や女の子もそれぞれの衣装がありました。コーシンニャ、プリガディオとガラナもおもしろかったです。私にはめずらしいものではなかったけど、とってもおもしろかったです。とても楽しかったです。(外国籍児童の感想)

あいさつが日本語だったのですごいなと思いました。1番すごいと思ったのはカポエイラです。側転をやったり、回し蹴りっぽいのをやったり、ほかにもいっぱいすごい技をやったので、けっこうしゃべりながら見ていました。(日本ラチーノ学院の人が作ってくれた)ジュースやチョコとかもおもしろかったです。

日本ラチーノ学院の人との関わりのなかで、「まずは知ること、関わっていくこと、交流しあうこと、お互いを認めあえること」をめあてに取り組んだことで、外国籍児童の自尊感情を高めることができ、また周りの児童も「身近な人の気持ちを大切にしたい」という感情が育ってきた。

日本ラチーノ学院は校区にありながら、今までは地域との交流が少なかったのも、保護者にとっても、「ひびきあい活動」や「運動会」での交流が初めてであった。小学校で交流したことをきっかけに家庭や地域に広がり、日常的に交流できる場所や機会を望む声が出てきた。

日本ラチーノ学院の皆さんとは、運動会の際に初めて「カポエイラ」を見せてもらいました。また、「ひびきあい活動」で、親子で一緒に交流を深めることができました。そして、そのことを通じて、家でも感想を言ったり友だちと話をしたりしました、さらにこれからも、ラチーノ学院の人と交流を深め、友情の大切さを学んでほしいと思います。(保護者の感想)

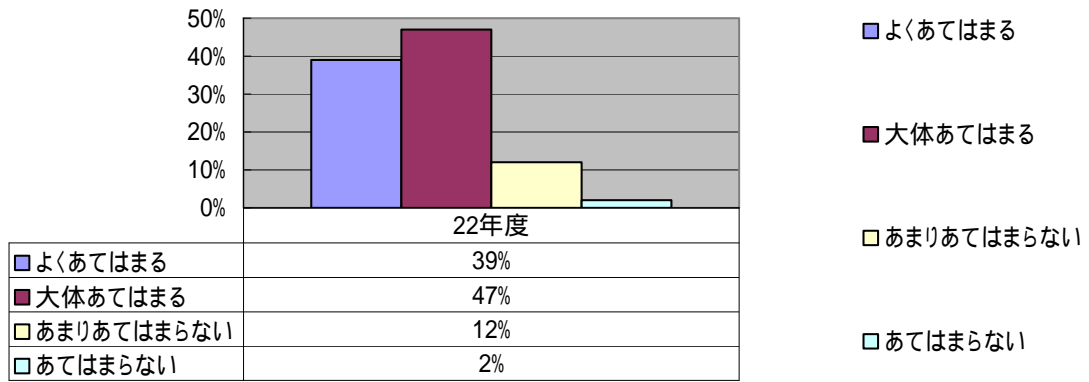
地域の中にある日本ラチーノ学院の子どもと活動を通じてふれあうことは素晴らしいと思います。これからも、日常的な活動の中にも、交流できる場面があるといいですね。(地域の人の感想)

言葉や食べ物の違いは本を読めばわかるが、その子どもの持っている文化を全部わかることは、当然のことながら無理なことである。そのために、こちらが当然だと思って何気なくやっていることや配慮しているつもりでやっていることが、理解されなかったり不安にさせたりしたこともあった。このことから取組を継続していく重要性があると考えた。

事後の学校評価(児童評価)で下のような結果が出ており、一連の取組が一定の評価につながっていると思われる。

しんどさを背負った子どもたちの姿に目を向け、話し合い、目標を設定して人権教育に取り組み、授業づくり・集団づくりについて共通理解を図りながら実践をすすめることで、すべての子どもたちが互いに認め合い、生き生きと過ごすことができる学校づくりができると考える。

「友だちのよさを認め、一人ひとりの思いを大切にした教育を行っている。」



【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

近江八幡市立八幡小学校

ブラジルからの生徒たちが在籍していることを受け止めて実践している点に特徴がある。人間関係づくり,学力保障,人権・部落問題学習を三本の柱として,ブラジルからの子たちが直面している課題を軸にしながら,校区にある準学校法人日本ラチーノ学院とも交流を重ねている。外国からきた子どもたちが肩身の狭い思いをしている例が各地にある。八幡小学校では,子どもたちがそのような思いを重ねずにすみ,みんなが生き生きと暮らせるような学校をめざしている。活動の結果,周りの子どもたちがポルトガル語で話しかけるなど,ブラジルからの児童たちへ積極的に働きかけるようになった。このように,受け入れる周りの児童たちにこそチャレンジすべき課題があることを明確にし,周りの子どもたちが認識を深めて成長することを通してブラジルからの生徒たちが自分を素直に出せるようになっていく。そして,そのことを通して,周りの日本人の子どもたちも元気になっている。